さらに先へと進んでいくこと
――バタイユにおける非 - 知と賭け――

Aller plus loin: le non-savoir et le jeu chez Georges Bataille

横田祐美子*

はじめに

20 世紀のフランスを代表する思想家の一人であるジョルジュ・バタイユ（Georges Bataille, 1897-1962）にとって、「エロティシズム」や「贈与」、「共同体」といった今日前景化されやすいテーマと同じかそれ以上に重要だったのが「思考」についての問いである[1)]。思考とは何か。それはつねに「何か」についての思考なのか。そうであれば、「何か」として言い表すことのできないものを思考することは不可能なのか。これらの問いがバタイユ思想全体を貫いており、とりわけ「無神学大全」に含まれるテクストには「思考」それ自体についての思索を行った形跡が顕著に見られる。のちの哲学者ジャン＝リュック・ナンシー（Jean-Luc Nancy, 1940-2021）の思考論に多大なインスピレーションを与えてきた[2)] バタイユによれば、「さらに先へと進んでいくこと」（aller plus loin）という表現からも分かるとおり、思考とは何らかの到達点が設定されているものではなく、すでに有している知識の内部にとどまらず、外部へと赴くことを意味していた。その際、外へと開く思考は逆説的にも「非 - 知」（non-savoir）という名称を与えられ、通俗的な思考様態とは異なるものとして描き出されることになる。それでは、バタイユ思想において通俗的な思考とはいかなるものであり、「非 - 知」はどのような仕方で

＊衣笠総合研究機構研究教員助教

通俗的な思考を超え出ていくのだろうか。本稿ではこうした問題提起のもと、バタイユ思想において「さらに先へと進んでいくこと」に結びつけられる「賭け」のモチーフや、「非 - 知」という用語の理解を深めるためにカント以降の哲学潮流において大きな意味を付与された「無限判断」の議論をも参照しながら、バタイユの思考論の内実を明らかにしていくことを試みる。

1. 推論的思考とその射程

まずは私たちが普段行っている思考を、バタイユがどのようなものとして理解し、描写し、説明していたのかを整理するところからはじめよう。一般に、「思考する」とは何をどうすることなのだろうか。

「無神学大全」の第一巻にあたる『内的経験』第四部のデカルトをめぐる議論のなかで、バタイユは神が有するであろう思考様態と人間の思考様態の違いについて次のように述べている。

> 神はおそらく自身を認識することができるが、それは私たちに固有な推論的思考〔pensée discursive〕の様式に従ってのことではない。[3)]

ここから「推論的思考」が人間特有の思考を表す語として用いられていることが分かる。これはいかなる思考なのか。辞書的な定義にもとづけば、「推論」とは既知の事柄を土台にして未知の事柄を推し量り、それによって新しい知識や情報を獲得する思考過程を意味する。バタイユは「推論的思考」や「推論的認識〔connaissance discursive〕」、あるいは端的に「推論〔discours〕」や「認識〔connaissance〕」という表現を用いながら、このような知的作用の特徴を新たな知の導出というよりも、むしろ既知への回収や既知の領域の拡大といった側面から光を当てる。

> 認識するとは既知に関係づけること、知らないものが他の知っているものと同じであると把握することを意味している。このことは、あらゆるものが基盤とする堅固な大地を前提とし（デカルト）、知の循環性を前提としている（ヘーゲル）。[4)]

既知にもとづく思考は、私たちが見知らぬものに遭遇した際、これは何に似ているだろうか、どこに分類されるだろうかと問うことで、見知らぬものをすでに知っているものの体系や枠組み、関係性のなかに引き入れる。そうすることで、意味づけ、名を与え、知らなかったものを「何か」として知る。フランス語の discours が「推論」のみならず「言説」を意味する以上、「推論的思考」によって獲得される知は言語と不可分であり、知りえたものは必ず名指しうるものとなる。つまり、ひとは言語が及ぶ範囲内で眼前の対象や事象を言い表し、「何か」として捉える。このような知的作用を駆使すれば、私たちにとって絶対に知りえないものや認識しえないもの、語りえないものは原理的に存在しない。あるのはただ、いまはまだ知られていないことだけだ。そこにおいて未知は、いずれ既知に変換されていくものなのである。

そのためバタイユは、推論をベースにした思考様態について「既知の事象の限りない連鎖は、認識にとってはそれ自身の完結でしかない」[5)] と述べる。見知らぬものをすでに知っているものに結びつけていくのであれば、目新しいはずのものを「認識する」（connaître）ことは結局のところ知っているものを「ふたたび－認識する」（re-connaître）ことでしかない。「推論的思考」は既知の領域を拡大しこそすれ、既知の外部に出ることはなく、知っているものの内部にとどまっている。だからこそバタイユは、このような事態を「知の循環性〔circularité du savoir〕」や「まさに閉じ切った円環〔cercle bien fermé〕」[6)] などと表現するのだ。したがって、私たちに固有の思考様式とされる「推論的思考」は、既知によって成り立つシステムの内部に未知を取り込むことで、知っていることをふたたび知るという再認による閉鎖的な構造

を有しているのである。

こうした思考の在り方を、バタイユは私たちの通俗的な思考様態として提示するのだが、それはなにも知的作用にのみ関わる問題ではないと指摘する。すなわち「推論的思考」は思考のみならず、人間の在り方や生き方に深く関与しているのである。

> 「行動」は完全に企て〔projet〕に支配されている。そして鬱陶しいことに、推論的思考はそれ自体が企ての実存様式のうちに嵌まり込んでいる。〔…〕企てはたんに行動に含まれ、行動に必要とされる実存様式であるにとどまらず、逆説的な時間におけるひとつの存在の仕方である。要するに、それは実存の延期〔*remise de l'existence à plus tard*〕なのだ。[7)]

バタイユによれば「推論的思考」は「企て」に貫かれている。「企て」とは何か。それは「実存の延期」という表現から分かるように、現にここにある生をいまここのためにではなく、もっとあとの未来のために繰り延べることである。たとえば、畑を耕すという「行動」は作物を育てるための「企て」であり、作物を育てるという「行動」はその収穫物を得るための「企て」であり、穀物や野菜などを収穫するという「行動」はそれを売って金銭を得たり自身の腹を満たしたりするための「企て」である。そしてまた、ひとは明日のために畑を耕すのだ。つまり「企て」とは未来の目的に向かって自己を投企し、現在の行動を未来に従属させることだと言える。現在の行動は現在のためにではなく、未来のためになされており、こうしたことが延々とつづいている。「推論的思考」がもつ既知の連なりとしての円環のイメージや循環性といった特徴は、このような「企て」の構造と重ねられているのである。

また、「企て」のサイクルのなかで人間は、ありのままの自己自身を生きているというよりも、労働を成り立たせるひとつの部品に成り下がっている

とバタイユは考える。畑を耕すひとは「農夫」であり、子供の面倒を見るひとは「保育士」であり、学生に何かを教えるひとは「教師」である。労働というシステムの内部で、ひとは職務に関連づけた「何か」として自己を規定し、仕事をしているかぎりはその職務を全うしなければならないが、往々にして仕事は私生活に影響を及ぼすようになる。この労働モデルと「推論的思考」は、バタイユにとって根を同じくしているのである。『ニーチェについて』を見てみよう。

> 推論的であれば、思考はつねに諸々の点を犠牲にして、ひとつの点に注意を向ける。推論的思考は人間を人間自身から引き剝がし、人間を鎖の環の一部に還元してしまう。〔…〕「手つかずの人間」はある脅威に曝されながら生きている。脅威とは、そのひとの就いている職業が、そのひと自身に取って代わろうと目論んでいるということなのだ！[8)]

ここで言われているのは、「推論的思考」のもとではそのものとしての人間の存在様態が奪われる危険性があるということだ。たとえば自分を「サラリーマン」と規定し、労働のサイクルのなかに置き入れることで、そのひとはそれ以外の在り方ができなくなる恐れがある。そこにおいて私は私として存在しているのではなく、私の職業としての在り方に侵食されている。「推論的思考」は見知らぬものを知っているものの連鎖のなかに組み込むだけではなく、その思考を行使する人間自身をも巻き込んでいくのである。

以上から、「推論的思考」はすべてを既知へと導いていく思考であると同時に、労働モデルをベースにした未来優位の時間性や目的論、ある種の隷属性といった「企て」の問題系をその射程に収めるものであることが読み取れる。たしかに、私たちの思考は日々の問題解決に向けて行使されるものであり、そのつど答えを出すことが求められる。そして、問うことや思考することそれ自体を目的にした思考では当然ながらなくなっている。引用した言葉

の端々からも伝わるように、バタイユは「推論的思考」に対して批判的なまなざしを向け、このような思考だけが唯一の思考ではないと私たちに伝えようとする。それでは、「推論的思考」とは別の思考としてバタイユが構想しているのは、いったいいかなる思考なのか。

2. さらに先へと進んでいくこと、賭けの思考

導きの糸となるのは「さらに先へと進んでいくこと」というバタイユの表現である。

> 私たちに期待できるのは、可能な限り先へと進んでいくことであって〔aller le plus loin possible〕、到達すること〔aboutir〕ではない。反対に、依然として人間的に批判されるべきなのは、完遂される瞬間に関係づけられることでしか意味をもたない企てである。私はさらに先へと進んでいくこと〔aller plus loin〕ができるだろうか。自分の努力全体を連係させることなど期待してはいない。私はさらに先へと進んでいく〔je vais plus loin〕。[9)]

同様のフレーズが繰り返され、「さらに先へと進んでいくこと」と「企て」が対置させられている。「企て」は前節で見たとおり「推論的思考」の特徴と合致しているため、それとは異なる思考を表す言い回しが「さらに先へと進んでいくこと」となる。「推論的思考」は答えを導き出すという目的の達成へと向かう思考であり、ここでは「到達」や「完遂」といった言葉によってそれが強調されている。つまり、「推論的思考」は一定の範囲内で完結する思考であり、このことが知の循環性や閉鎖性、円環のイメージを支えているのである。

そうであれば、「さらに先へと進んでいく」思考はどのような特徴をもっ

ていると言えるだろうか。「推論的思考」という閉域の外部に思考が赴くということは、まずもって言葉による意味づけを逃れていくものを思考しようと試みることではないだろうか。「言説」にもとづく「推論的思考」は未知のものを既知のものに照らし合わせて「何か」として規定し、名を与える。そこにはあらゆるものを名指しうるとする姿勢が見られるが、「さらに先へと進んでいく」思考は言語化しえないものへと差し向けられている。

> もし私が思い切って「私は神を見た」と言うとしよう。そうすれば、私の見るものは変化してしまうだろう。しっかりと掴み取ることのできない未知のものの代わりに〔…〕死んだ客体と神学者のものがそこにはあるだろう。[10)]

> 神という最後の言葉は、もう少し先に進めば〔un peu plus loin〕、すべての言葉が欠落することを意味している。[11)]

言語によって把握することは、対象をそのままに理解するのではなく、言葉が届きうる範囲内に対象を縮約してしまうということがここでは示唆されている。西洋文化における最大の語であり、フランス語においても無冠詞の大文字で書かれる「神〔Dieu〕」ですら、その先に進めば言語化しえないものが待ち受けており、つまるところ「神」は未知のものを縮小したような言葉でしかないということになる。バタイユはヘーゲルやコジェーヴの影響のもと、言葉がいきいきしたものを捉え損ねることを「殺害」であると考えている[12)]。それゆえ「さらに先へと進んでいく思考」は、「推論的思考」が言語化しうるものに限定された思考であるのに対して、言葉や意味、さらには形態やイメージからも逃れていく未知のものへと向かう思考なのである。

したがって、この場合の未知のものとは、いずれは既知に還元されていく未知のもの、たんにいまだ知られていないものとは明確に区別される、人間

にとって絶対的に知りえないものを意味している。それは推論的な知にとってはまったき他者と呼べるものであり、どれほど既知の領域を拡大したところで、そのなかに組み込むことのできない本質的な外部なのだ。バタイユはすべてを知ることができるという「推論的思考」の傲慢さを批判し、推論や言説によってもけっして届くことのない他者が、既知の円環の外側につねに存していることを指摘する。「さらに先へと進んでいく思考」には、「推論的思考」にとっての他者を排除しようとするのではなく、明晰判明な知の裏側に隠れた未知のものや言語化しえないものをまなざそうとする倫理的態度を見出すことができるのである。

このようにして、バタイユにとって論じるべき「さらに先へと進んでいく」思考は、推論や言説をたえず超過するものを思考しようと試みるのだが、言うまでもなくそれは私たちが普段から行っている既知を土台とした積み上げ式の思考とは異質なものである。このことを言い表すために、バタイユは「さらに先へと進んでいく」思考に「賭け」のモチーフを結びつける。

> 賭ける〔jouer〕とは限界に触れることである。可能な限り先へと進んでいき〔aller le plus loin possible〕、深淵の縁に立って生きることなのだ！[13)]

「推論的思考」がすでに知っていること、確実なことに根拠をもつ、ある意味で堅実な思考様態であるとすれば、「さらに先へと進んでいく」思考は計り知れないものを前にして危険に身を曝す思考である。というのも、「推論的思考」とは違って「さらに先へと進んでいく」思考は、未知のものを既存の意味連関のなかで「何か」として捉えることも理解することもできないからだ。絶対的に知りえないものは、既知の延長線上に置かれてなどいない。そのため、「賭け」の思考は「推論的思考」が未来に対して有している予測可能性や計算可能性を超え出ていくのである。

賭けるということ、それはひとりの人間にとっては負けるか勝つかのチャンスであるが、全体にとっては所与を乗り越えること〔dépasser le donné〕、彼方へと赴くこと〔aller au-delà〕である。賭けるとは結局のところ、かつて存在しなかったものを存在させることなのだ。[14)]

ここでは「乗り越える」や「彼方へと赴く」といった「さらに先へと進んでいくこと」と同様の意味内容をもつ表現が用いられ、「賭け」がすでにあるものの焼き直しではなく、まったく新しいものを到来させることが述べられている。「企て」に貫かれた「推論的思考」では、すでに知っているものから出発して見知らぬものを認識するため、以前から存在していたものを再認する構造をもっているにすぎなかった。しかし「賭け」の思考は、ある事柄がある結果を導き出すだろうといった予測や計算を超え出ており、すでに知っていることで人間に安心感を与える既知の同一性や同質性に揺さぶりをかけ、「推論的思考」にとって完全に異質な他者の存在を告げ知らせるのである。

以上のように、バタイユは私たちの思考が「推論的思考」で立ち止まるのではなく、それによって考えられる以上のものをひとは考えてしまうという思考のもつ過剰さを「さらに先へと進んでいくこと」や「賭け」といった表現によって描き出そうとしている。もちろん、過剰な思考は言葉によって限定されうる対象へと向かうのではなく、言葉がもはや届かない深淵へと向かっている。

この思考を、バタイユは逆説的にも「非 - 知」（non-savoir）と言い換える。知に否定辞を冠することで、あたかも知ではないかのような趣があるこの言葉は、しかしながら「非 - 知から出発して新たに可能な知がある」[15)] と言われるように、推論や言説に拠って立つ知とは異質な知を指し示している。それでは、なぜバタイユはこれに「非 - 知」という名称を与えたのだろうか。「知である」とも「知ではない」とも明言されない「非 - 知」とはいったい

何なのだろうか。「さらに先へと進んでいくこと」や「賭け」という修辞的・文学的な表現とは別の仕方で、この特異な思考様態について次節では考えてみたい。

3. 非 - 知と無限判断

バタイユのテクストでは「推論的思考」と「企て」が同系列の用語として機能しており、それらとは異なる系列の言葉として「さらに先へと進んでいくこと」と「賭け」が用いられていることが明らかとなった。ここに「非 - 知」というキーワードを加えることで、「推論的思考」とは別の思考がいかなる思考であるのかという問いについて、さらに一歩踏み込んで検討していくこととする。

これまでの議論で引用した『内的経験』や『ニーチェについて』といった1940年代の著作を1950年に「無神学大全」という総題のもとにまとめる計画を示した直後、バタイユは50年代前半に「非 - 知」についての講演を立てつづけに行っている。そのなかの講演草稿「非 - 知と反抗」において、彼は「非 - 知」が「推論的思考」とは異質な思考であることをあらためて次のように示している。

> 私は、知が私たちを隷属させていると信じている。あらゆる知の基盤には隷属性があり、それは各々の契機が別の契機に、あるいはそのあとにつづく別の諸契機のためにしか意味をもたないという生の様態を受け入れているということだ。〔…〕私にとって決定的なこと、それは私の思考が賭けという対象しかもたず、賭けにおいて私の思考は、私の思考という労働を無に帰するのだということ。このことをあなたたちに感じ取ってもらえると思う。私の思考についての発表をこれまで聞いてこられた方々は、私の思考が根本的な仕方で思考それ自身に対するたえざる

反抗だと理解されることだろう。[16]

「非 - 知」について語るなかで、バタイユはそれが労働をモデルとした知的作用である「推論的思考」とは根本から異なる「賭け」の思考であり、そのような思考は「推論的思考」に対してつねに異議申し立てを行うと説明する。ここにおいて「思考」という言葉は二重化され、「推論的思考」とそれへの反抗としての「賭け」の思考、すなわち「非 - 知」に分かたれている。それゆえ「非 - 知」は、その字面が私たちに与える印象とは異なり、知の完全な否定を指すわけではけっしてない。推論や言説にもとづく知を批判しながらも、知や思考としての要素は何らかの仕方で残存していると言える。

とはいえ、「非 - 知」という表現は「知である」とも「知ではない」とも区別されている。このことをどのように理解すればよいのだろうか。同じ講演草稿にある次のフレーズをもとに、以下では「無限判断」[17] についての議論を踏まえながら考えてみたい。

> 明らかになるのは大いなる賭けとは非 - 知だということである〔le jeu majeur est le non-savoir〕――賭けとは定義しえないもの〔le jeu est l'indéfinissable〕、思考が抱懐しえないものなのだ。[18]

講演のクライマックスにおいて明示されること、それは「大いなる賭けとは非 - 知である」というひとつの命題である。これは「大いなる賭けとは知である」とほとんど反対の意味内容に見えるのと同時に、「大いなる賭けとは知ではない」とも実は同義ではない。哲学史において重要な著作のひとつであるイマヌエル・カント『純粋理性批判』のいわゆる「判断表」に従って、このバタイユのフレーズを分析してみると以下のように図示することができる。

「大いなる賭けとは知である」（S は P である）

「大いなる賭けとは非 - 知である」（S は非 P である）

「大いなる賭けとは知ではない」（S は P ではない）

まず「大いなる賭けとは知である」（S は P である）は「肯定判断」と呼ばれ、「大いなる賭けとは知ではない」（S は P ではない）は「否定判断」と呼ばれる。双方は「～である」という実在性と「～でない」という否定性を示す対立的な命題である。このふたつとは別に、「無限判断」と呼ばれるものが存在する。それがバタイユの文章「大いなる賭けとは非 - 知である」にも見られる S は非 P であるという構造である。これは「知である」や「知ではない」という命題といったいいかなる関係にあるのだろうか。「無限判断」について非常に明快な解説を行っているスラヴォイ・ジジェクの『パララックス・ヴュー』を参照してみよう。

> カントは、否定判断と無限判断〔indefinite judgment〕という重要な区別を導入した。〔…〕つまり、「彼は死んではいない〔he is not dead〕」と「彼は非死である〔he is un-dead〕の差異である。無限判断は、基本となる区別を掘り崩す第三の領域をひらく。「非死である者」は、生きてもいなければ死んでもいないのであり、正確には怪物のような「生ける死者」である。そして、同じことが「非人間的〔inhuman〕」にもあてはまる。〔…〕「彼は非人間的である」は〔…〕人間でもなければ、人間にあらざるものでもなく、おそろしい過剰〔terrifying excess〕によって特徴づけられているという事実を意味している。そして、この過剰は「人間性」として理解されるものを否定するにもかかわらず、人間であることからも切り離せないのである。[19]

ここからは「無限判断」が「肯定判断」と「否定判断」という二項対立を超えたものを指し示していることが読み取れる。「非死である」や「非人間的である」は、死や人間的であることをある意味で否定すると同時に、それらとの関係を完全に絶ち切るわけではない。そして、それは肯定と否定の二元論を乗り越えていく過剰性によって裏打ちされているのである。ジジェクの説明に倣えば、バタイユの「非 - 知」とは「推論的思考」に支えられている知を否定しながらも、知そのものとの関係をどこかに残している。そして、「賭け」が「推論的思考」によっては抱懐しえないもの、「定義しえないもの〔l'indéfinissable〕」を開示するところに「無限判断〔indefinite judgment〕」と同じ過剰性を「非 - 知」についての命題が共有していると言える。したがって、「非 - 知」とはやはり知に対する肯定と否定という対立項のどちらにも完全には与しない「さらに先へと進んでいく」思考なのである。

バタイユのテクストが文学的な様相を強く呈していることからして、「非 - 知」についての説明にカント哲学の「無限判断」を関連づけることは先行研究においても稀ではあるが、『内的経験』等の著作において少ないながらもカントへの言及が見られることを考慮すれば、「無限判断」の議論は「非 - 知」という思考様態の輪郭線をより明瞭にすることに役立つものであると思われる。私たちが普段行っている思考はまちがいなく「推論的思考」だ。しかしバタイユは、通俗的な思考だけが知そのものを支えているわけではないこと、要するに「推論的思考」には外部としての思考があることを、思考の過剰さという観点から論じようとしていたのである。

おわりに

本稿では、バタイユの思考論において注目すべき表現である「さらに先へと進んでいくこと」や「賭け」を導きの糸としながら、私たちにとって馴染みある思考様態としての「推論的思考」とは別の思考について論じてきた。

それは「非 - 知」と呼ばれるものであり、「推論的思考」に反抗しつつも知や思考そのものからは切り離しえない、特異な思考様態であった。バタイユの思考への姿勢は、すでに知っているものだけを知りたいという、安定性を目指す人間の欲望に反旗を翻すものであり、「推論的思考」における既知の循環性や再認の構造を強く批判していた。なぜならそれは「もう分かった！」「知ってる！」という一定の範囲内で立ち止まる思考だからであり、知の円環の外部をまなざすことを恐れているからだ。「さらに先へと進んでいく」思考はその本質的な過剰さから停止することを知らない。このような思考こそがたえず私たちを問いへと送り返し、私たちの通常の思考では捉えられないものがあることを、その裏面によってこそ私たちの知が支えられていることを教えるのである。

情報の海のなかで、現代の私たちはもはや「推論的思考」ですら上手く行使できなくなっているのかもしれない。しかし、推論や言説による思考そのものを再活性化させなければ、それを超え出る「非 - 知」の好運を掴むことも私たちにはできなくなってしまうだろう。いずれにせよ、ジャック・デリダがアリストテレスの言葉を借りて言うように、時代が思考しないにしても、そのことについては思考しなければならないだろう[20]。そして最終的には、ジャン＝リュック・ナンシーがバタイユの影響下で述べているように、「私たちはさらに先へと進むほかないのである〔Nous ne pouvons qu'aller plus loin〕」[21]。

本稿は 2021 年 3 月 27 日に立命館大学で開催された立命館大学間文化現象学研究センター／東京大学共生のための国際哲学研究センター共同主催シンポジウム「ひとはいかにして思考するのか？――バタイユ、ブランショ、ナンシー」での発表を論文化したものである。また、本稿は JSPS 科研費 19K23058 の助成を受けたものである。

註

1）「思考」は、「エロティシズム」などと比較すれば地味なテーマではあるが、バタイユ思想の核心部を理解するために避けては通れない部分でもある。哲学的な論点を踏まえつつ、バタイユ思想における「思考」や「知」、「理性」の在り方を考察する先行研究として次の文献が挙げられる。Robert Sasso, *Georges Bataille, le système du non-savoir : une ontologie du jeu*, Éditions de Minuit, 1978. Franco Rella, Susanna Mati, *Georges Bataille, filosofo*, Mimesis, 2007. Boyan Manchev, *L'altération du monde : pour une esthétique radicale*, Éditions Lignes, 2009.〔ボヤン・マンチェフ『世界の他化（アルテラシオン）――ラディカルな美学のために』横田祐美子・井岡詩子訳、法政大学出版局、2020 年〕Michel Surya, *Sainteté de Bataille*, Éditions de l'Eclat, Paris, 2012. 横田祐美子『脱ぎ去りの思考――バタイユにおける思考のエロティシズム』、人文書院、2020 年。なお、本稿は前掲の拙著の内容と部分的に重なるが、拙著では取り上げられなかった「賭け」や「無限判断」という観点から「非 - 知」の思考を論じ直す点に新規性がある。

2）たとえば、ナンシーの『限りある思考』に収録された「外記」や「犠牲にしえないもの」、『剥ぎ取られた思考』の表題作である「剥ぎ取られた思考」ではバタイユから多くの着想を得ていることが読み取れる。Jean-Luc Nancy, *Une pensée finie*, Galilée, 1990.〔ジャン = リュック・ナンシー『限りある思考』合田正人訳、法政大学出版局、2011 年〕Jean-Luc Nancy, *La pensée dérobée : accompagné de "L'échappée d'elle" de François Martin*, Galilée, 2001.

3）Georges Bataille, *L'expérience intérieure*, in *Œuvres complètes*, tome V, Gallimard, 1973 [1943], p. 126.〔ジョルジュ・バタイユ『内的体験――無神学大全』出口裕弘訳、平凡社（平凡社ライブラリー）、1998 年、247 頁。なお本稿では引用の際に拙訳を用いたが、既訳を適宜参照させていただいた〕

4）*Ibid.*, p. 127.〔同書、249 頁〕

5）*Ibid.*, p. 127.〔同書、249 頁〕

6）*Ibid.*, p. 127.〔同書、249 頁〕

7）*Ibid.*, p. 59.〔同書、115 頁〕

8）Georges Bataille, *Sur Nietzsche*, in *Œuvres complètes*, tome VI, Gallimard, 1973 [1945], p. 154.〔ジョルジュ・バタイユ『ニーチェについて』酒井健訳、現代思潮新社、1992 年、263-264 頁〕

9）*Ibid.*, p. 200-201.〔同書、348 頁〕

10）*L'expérience intérieure*, p. 16.〔『内的体験』、23 頁〕

11）*Ibid.*, p. 49.〔同書、93 頁〕

12）Cf. Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel : leçons sur la Phénoménologie de l'esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des hautes études,*

réunies et publiées par Raymond Queneau, Gallimard, coll. « Tel », 2014 [1947], p. 436.〔アレクサンドル・コジェーヴ『ヘーゲル読解入門――『精神現象学』を読む』上妻精・今野雅方訳、国文社、1987 年、207 頁〕

13）*Sur Nietzsche*, p. 106.〔『ニーチェについて』、173 頁〕

14）*Ibid.*, p. 140.〔同書、236-237 頁〕

15）Georges Bataille, « L'enseignement de la mort », in *Œuvres complètes*, tome VIII, Gallimard, 1976 [1952], p. 205.〔ジョルジュ・バタイユ『新訂増補 非 - 知――閉じざる思考』西谷修訳、平凡社（平凡社ライブラリー）、1999 年、42 頁〕

16）Georges Bataille, « Le non-savoir et la révolte », in *Œuvres complètes*, tome VIII, Gallimard, 1976 [1952], p. 210-211.〔同書、52-53 頁〕

17）「無限判断」については次の文献が大いに参考になり刺激的であった。石川求『カントと無限判断の世界』、法政大学出版局、2018 年。

18）« Le non-savoir et la révolte », p. 213.〔『新訂増補 非 - 知――閉じざる思考』、57 頁〕

19）Slavoj Žižek, *The parallax view*, MIT Press, 2009, p. 21-22.〔スラヴォイ・ジジェク『パララックス・ヴュー』山本耕一訳、作品社、2010 年、43 頁〕

20）Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, Seuil, coll. « Tel Quel », 1967, p. 226.〔ジャック・デリダ『エクリチュールと差異〈新訳〉』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013 年、304 頁〕

21）Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, nouvelle édition revue et augmentée, Christian Bourgois, coll. « Détroits », 1990 [1986], p. 102.〔ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体――哲学を問い直す分有の思考』西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001 年、76 頁〕